

英語史からみた *Let it be*

小林 茂之

0. はじめに

祈願表現は、仮定法によって表されていた。現代でも英国国歌の題名・歌詞において ‘God save the Queen’ のように、*save* に3人称単数語尾 *-s* が付かないのは、この用法が仮定法であるためである。このような祈願を表す場合、現代英語では *may* を用いる方が分かりやすいが、*let* にも同様の構文がある。小論では、祈願を表す仮定法が *let* を経て *may* で表されることを辿ることで、ビートルズの曲名で有名な表題の *Let it be* という表現を英語史的に考察する。

1. 祈願を表す *may* と *let*

堀田 (2016) は、文頭の *may* 構文と *let* 構文との類似点について論じている。

may 祈願文と *let* 勧告文には類似点がある。いずれも統語的には節の最初に現れるという破格的な性質を示す。また、直後に3人称の名詞句を取ることができ、語用論的には祈願・勧告という似通った発話行為 (speech act; 話者の発話がそれ自体である効果・行為をなすもの) を担うことができる。さらに、いずれの発話行為も、古英語から中英語にかけて接続法 [(仮定法)] によって表しえたという共通点がある。

(堀田2016 : 107)

堀田は、また Rissanen (1999) が「[*may* 構文] の発達が [let 構文] の発達により促進された見ている可能性はある」と述べている。

Rissanen は、初期近代英語期に祈願の仮定法が *may* 構文に、勧告の仮定法が *let* 構文に置き換えられたとみている。

The optative subjunctive is often replaced by a periphrasis with *may* and the hortative subjunctive with *let* :

(Rissanen 1999 : 229)

(1) ‘A god rewarde you,’ quoth this roge ; ‘and in heauen may you finde it.’

(Rissanen (229), [HC] Harman 39) ¹⁾

(2) Let him love his wife even as himself : That’s his Duty.

(Rissanen (230), [HC] Jeremy Taylor 24)

次節では、近・現代英語期の英訳聖書を通して、仮定法から *let* 構文や *may* 構文に変化する過程を辿ることにする。

2. *Let it be* の変遷

このフレーズは、ビートルズの *Let it be* のタイトルおよび歌詞でポップスファンの間でもよく知られている。ポール・マッカートニーは、少年時代にリヴァプールで教会のクワイアに所属していたことがあった。だから、このフレーズが、聖書や讚美歌の歌詞から意図的ではないにせよ、(無意識に) 引用されたとしても不思議ではない。

しかし、*Let it be...* が ルカ 1 : 38 に由来するとしても、New King James Version (NKJV) ²⁾ における表現であって、それ以前の初期近代英語による King James Version (KJV) または Authorized Version (AV) では異なるし、それ以降の現代英語による Today’s English Version (TEV) や New International Version (NIV) と異なる。

上記の英訳聖書のルカ 1 : 38 を時代別に比較してみよう。 ³⁾

(3) And Mary said, Behold the handmaid of the Lord ; be it unto me according to thy word. And the angel departed from her. (KJV)

(4) Then Mary said, "Behold the maidservant of the Lord! Let it be to me according to your word." And the angel departed from her. (NKJV)

(5) "I am the Lord's servant," Mary answered. "May it be to me as you have said." Then the angel left her. (NIV)

(6) "I am the Lord's servant," said Mary; "may it happen to me as you have said." And the angel left her. (TEV)

一般には現代英語の表現からみていく方が分かりやすいので、TEVからみていこう。*may* が節頭にある祈願文であり、「…この身に成りますように。(新共同訳)」に対応することはすぐに理解できよう。NIVも同じ構文であるが、主動詞が *be* である。近・現代の英語では事態の変化を表す場合でも、*become* ではなく *be* が使われるので、そのような用法と解することができよう。ところが、19世紀のNKJV (=RV)⁴⁾ では、*may* ではなく、*let* が節頭に用いられている。*May* と *let* の競合関係はここでは取り上げることをしないが、*let* が *may* に置き換えられていることから、この *let* が使役構文として用いられているのではなく、祈願文のヴァリエーションとして使われていることが分かる。つまり、NKJVの *let it be* は命令でも放任でもなく、神への祈願を表す構文なのである。上記の英語訳聖書で最も古い1611年刊のKJVでは、*let* はなく、*be* が節頭にきている。この *be* は仮定法 (subjunctive mood) であって、本来 *let* や *may* の助けがなくても、祈願を表すことができたのである。

ただし、既にKJV (AV) においても *let* を用いた祈願文が使われている。橋本 (2004: 127-130) はこのような *let* 構文とヘブライ原典との関係を指摘している。

a. AV : Let the LORD be so with you,

b. HB : be so Yahweh with-you

[3.MS]

[主がお前たちと共におられるように。] (Ex.10:10) (橋本2004: 128)

同書によれば、「ヘブライ語では各人称に対する話し手の意思は動詞の活用形で示される。これらのうち2人称に対する話し手の意思は命令形で示され、3人称に対する話し手の意思は jussive 形で示される。後者においては、話し手の立場や身分が3人称の主語よりも優位な場合は、命令、勧告、忠告あるいは許可などを表し、話し手の立場や身分が3人称の主語よりも劣勢な場合には祈願や懇請などを表す」(橋本2004: 129)。したがって、出エジプト記10:10の例は、ファラオがモーセに言った言葉であるが、王であっても「主」より優位ではないので、祈願を表すと解釈できる。

橋本によるヘブル語の例は単語が英語に置き換えられているが、語順はヘブル語原典のそれを反映している。ヘブル語は動詞が文頭にくるV1言語であるので、KJVのルカ1:38は語順の上で英語訳を近づけようとした結果である。なぜなら、V1語順は近代英語期以前の中英語期に消滅したので、これは古語の化石的用法である。そのために、19世紀のNKJVでは、仮定法の衰退も関与して、文頭に *let* が置かれ、現代英語のNIVおよびTEVでは *may* が使われているのである。

3. おわりに

ビートルズの歌詞中では聖母マリアの言葉として本来の祈願の意味に解釈できるとしても、現代英語のNIVおよびTEVでは *let* は *may* に置き換えられているので、一般的には *let it be* はおそらくもはや祈願文として解釈されることは難しくなっていると推測できる。この曲の作曲時、もはや避けがたいビートルズの解散に対して、放任的に投げやりな気持ちが投影されたのかもしれない。

注

1) [HC] はHelsinki Corpusを表す。

2) New King James Versionという名称は、トマス・ネルソン社による。しかし、寺澤 (2013: 200) の英訳聖書の書誌によれば、*The Holy Bible, Revised Standard Version. Containing the Old and New Testaments, translated the version set forth A.D. 1611, revised A.D. 1881-1883 and A.D. 1901; compared with most ancient authorities and revised A.D. 1952.* (New York: Thomas Nelson) と同定

できる。

3) 本稿の引用は、Jバイブル（日本コンピュータ聖書研究会、販売：いのちのことば社）による。

4) 注1) に示した通り、NKJVはRSVの通称であるので、19世紀の英語が反映されている。おそらく、この名称変更には RV の著作権の使用許可が関与していると思われる。

引用文献

寺澤盾（2013）『聖書でたどる英語の歴史』、大修館書店。

橋本功（2004）『聖書の英語——旧約原典からみた』新訂第三版、英潮社。

堀田隆一（2016）『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』、研究社。

Rissanen, M. (1999) . Syntax. In Lass, R. (ed.) *The Cambridge History of the English Language*, Vol. 3, 187-331. Cambridge : Cambridge University Press.

（こばやし・しげゆき 聖学院大学人文学部教授）